



第5図 700mb continuity chart  
(Feb. 16~26, 1955)

20日 135°E 付近にバックし、21日再び 140°E に進み、22日頃最も強く発達し、150°E 付近に達し、そのまま東進している。地上の低気圧はこの上層の長波の谷ののとみてよく、short wave が long wave に重なることと発達すると云う一般ルールを実証しているわけである。

#### 4. む す び

### 〔書 評〕

森本良平著 日本の火山 創元社発行

こんなに読み易い火山の本は、始めて見る様な気がする。そして内容の一つ一つには、年月日、エネルギー火口の大きさ、圧力、その他、主要な量が正確に織りこんであるので、その道に、たずさわる人々も、そうでない人々にも貴重なことで、何かの時には勿論、実さいに応用する時にも他の専門書を引出す必要はなく、各火山活動の性質を判断するめに、間に合うのではないかと思う。

広い角度から、火山活動を理解する為になされて来た、数多くの貴重な研究やいろいろと難解な理論を、栄養の高い上にまことに美味に調理してあるように思う。そしてその食物が、快く口中に流れ込み、次々と胃腸へ溶け込んで行く快調さを、一読後感ずる。それはこの盛夏に読んで、涼味を味わえる程である。

最近問題を提供した6月24日阿蘇山の突然の爆発や、桜島、浅間、大島等と火山活動は、近年活況を逞し、学

1. P波、R波及びS波は3年間の統計では夫々総数の6割、1割、及び3割が日本付近に出現する。

2. 月別ではP波は3月が一番多く、7月最も少ない。R波は12月、1月が多くその他の月は少ない。S波は1月が一番多く4、5月が少ない。

3. 季節的にはP波は春多く夏少ない。R波は冬多く秋少ない。S波は冬多く春少ない。

4. S波の停滞日数は3日乃至4日が一番多い。

5. 長波が停滞する場合20°~40°E 付近の長波の谷と80°~100°E 間の長波の峰の動きから先行現象が見出し得られる。

6. 低気圧の発達に必要な条件の1つは、上層に長波の谷が発生又は存在することである。

終りに中田台長より色々助言のあったことを付記して感謝の意を表する。

### 文 献

- 1) 富岡定男 (1957) : 極東における長波の移動について、——東経 140 度線上に現われる長波の動向——研究時報 9, 475~479.
- 2) 富岡定男 (1958) : 日本付近における定常な長波の波長を現わす実験式について、研究時報 10, 53~56.

問的には勿論であるが、防災上、予知の問題は特別に、強く要求されてきた今日、この書物によって、益する面は、広いのではないかと思う。

例えば火山のうごきの章の 139 頁を引用すれば当時鳩山首相と片山哲氏の国会の質議応答を速記録から引き、片山さんは「国際紛争は火山のように突然起るものではなく云々」とあり又「火山研究者の書いた論文にでも、噴火の勃発という言葉が、よく見受けられる。火山の噴火は突然おこるものだという事は、この文の例を見ても一般に信じられていることといてよい。しかし最近の、火山学では、とりわけて、火山物理学の専攻者はそう考えていない。文章を書く時の慣例で無意識に勃発と云う語を使っているが、正確ないい方をすれば、噴火はとつぜん、おこるようになるだけで、われわれが、気がつかないうちに噴火のはじまる前から、すでにいろいろな現象が行われているのである、この事前現象に、注意することに噴火予知の研究ははじまっているといえよう。」とこの前後に火山研究家の実状を示し、火山噴火は勃発するという一般の常識を否定し、(25頁に続く)